（様式第1号）

研究No.（記載不要）	18 －文学－ 10

平成18年度配分　研究成果の概要

研究名	韓国の食文化からみる日常と非日常の連続性に関する研究				
配分を受けた特別研究費	文化政策学部長　特別研究費　1，100千円				
研究者氏名（代表者）	学部名	学科名	職	氏　名	共同研究の場合の分担
	文化政策	国際文化	准教授	林 在 圭	
共同研究者					

発表の方法（予定で可）	1 紀 要	号 数	第　　号（　年　月発行）
	2 学会等での発表 学会等名：日本生活学会	発表日（発表予定日）	平成19年10月7日
	3 その他 発表の方法：「韓国農村における食生活の実証的研究」（アサヒビール学術振興財団）	発表日（発表予定日）	平成18年 9月 29日

注：配分を受けた翌年度の6月末までに提出

（研究の目的等）

農耕社会を背景とする韓国の伝統的食生活は、医食同源（韓国では「薬食同源」と呼ぶ）の考え方に基づいており、今日でも強く生かされている。同時に、韓国における食生活の伝統は日常食だけで完結するものではなく、非日常の儀礼食を組み合わせることによって、全体的な栄養バランスをとってきた。しかし今日では、伝統的な食生活に大きな変化が見られる。本研究では韓国の農漁村地域を対象に、食生活の変化を医食同源思想がどのように変容しているかについて実証的研究を行い、韓国の食文化における日常と非日常の連続性とその乖離現象について明らかにすることを目的とする。

（研究の実施方法等）

農漁村地域（忠清南道唐津郡）を対象として、①まず日常食の基本的な食事パターンを分析する。日常食の調査は、摂取カロリー量を測定するというよりは、毎日摂取する料理の種類（調理法を含む）やその頻度および組み合わせを調べ、日常食の基本的パターンを析出する。②さらに、村落社会における祖先祭祀や通過儀礼を中心とする諸儀礼の頻度や儀礼食について明らかにする。とくに、儀礼食では魚や肉料理が重要な供物であるため、それらをたくさんこしらえ、家族や親族のみならず近隣にも分けて食する。こうした儀礼食が主たる動物性蛋白質の供給源ともなってきた。そのため、日常（食）と非日常（食）とは不可分の関係にある。

（得られた成果等）

韓国の人々はとりわけ食べ物を重視する。「飯を食べたか」という言葉が挨拶にもなっているほどである。これは貧しさ故に飯を食べたか否かをたずねるものではなく、食べる行為を重視する文化を持っているからである。韓国の食生活の伝統は日常食だけでは完結せず、儀礼食を組み合わせることで、成り立っている。日常食と儀礼食の大きな違いは、日常食が野菜中心であるのに対して、儀礼食では魚や肉料理が重要な供物となっている。こうした食生活の伝統は、医（あるいは薬）と食は源が同じであるという医食同源の考え方にも表れており、よい食事をとれば健康になると信じられている。村落社会における医食同源の考え方は、依然として強く受け継がれているものの、幼児を含む世帯では外食行動も増えつつあり、肉食化の傾向がみられる。また韓国人は1人で食べることを嫌い、「食事は皆で集まってするものだ」という意識が強く、お祝いや祖先祭祀の際には家族親族のみならず、近所や村人が共に食べる。しかし、1970 年代の都市産業化、1973 年の家庭儀礼準則、1985 年頃の高度経済成長、1990 年代以降の外食産業の隆盛などの外的要因によって、村落社会における食生活も大きく変わりつつある。1990 年代に入ると、一部の儀礼（婚礼・還暦など）を除き、儀礼食による食物の贈答交換機能は喪失し、日常食の肉食化が進行しつつあることがわかる。